
身辺雑記。

石榴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身辺雑記。

【Nコード】

N3236Q

【作者名】

石榴

【あらすじ】

とある世界の少女のとある日常の雑記。

○月×日

イタズラで幼児にされました。

ええ。大丈夫です。

元に戻る方法は分かっていますから問題ありません。負けません。

ええ。負けませんとも！

……何でアンタ精霊の癖に私にだけイタズラすんのよう〜！

基本三人称。

コメディ調ほのぼのです。

イタズラの産物（前書き）

最初のオハナシ。

イタズラの産物。

「っきゃああああ」

不意に隣室から届いた悲鳴に、ライトは慌てて立ち上がり、駆け出した。

隣に座っていたフォルテも同時に動きだした気配を感じたが、振り返る事なく隣室に急ぐ。

「リイ！」

ライトは叫ぶように名を呼びながら、ぶち壊す勢いで扉を開けた。

二人とも勢い良く部屋の中へ雪崩れ込み、素早く右手窓側の机の方へ視線を向けた。

そこに居る筈の。

悲鳴をあげた少女を視界に捉える為に。

「…リイ？」

「何が、あった？」

殆ど同時に飛び込んだ少年二人は、少女を見た瞬間、動きを止めた。程度の差こそあれ、瞳を見開き驚きを素直に顔に出した二人に、少女は半泣きの表情で口を開いた。

「シーリンにイタズラされたあ」

ふにゃあ〜と途方にくれた仔猫のように哀れな泣き声がリイナの口からこぼれた。

それは幼い容貌と相まって大変に庇護欲をそそる可愛いらしい風情だった。

…例え彼女が服の海に溺れていようとも。

身に合わない大きすぎる服の中に頭以外を埋もれさせ、涙目で見上げるリイナの姿に、踏みしめた堅い筈の床がぐにやりと歪んだような気がして、ライトはぐらりと上体が傾いだ。

「効果の持続時間は？」

フォルテが呆れたような口調で端的に質問すると、リイナは少しだけ悔しそうな表情を浮かべながら口を開いた。

「わかんない。風起こされて色々混ざったみたいだし…目、開けてられなかったもん」

想像つかないよ

と拗ねたようにぼつりと呟いた。

ライトは、小さなため息を一つつくとリイナに歩みより、彼女の両脇に手を入れ持ち上げた。

だぶだぶのワイシャツ以外の服はリイナの身体から離れ、その場に脱け殻のように残された。

服の海から引き揚げられたリイナは推定4・5歳位の姿をしていた。

「懐かしいな」

リイナを吊り上げたままライトが可笑しそうに言っと、リイナは不機嫌そうにライトを睨んだ。

「懐かしくないもん！てか腕痛い」

「ああ、悪い」

仔犬に吠えられた、というような笑い混じりの謝罪を言っと、ライ

トは一旦リイナを床に降ろした。

そして自分の上着を脱いで、それでリイナをくるむと、両膝裏に右腕を回して掬い上げた。

一連の動作に無駄は無く、とても素早い行動だった。

リイナは益々眉根を不快そうに寄せたが、何も言わず、渋々安定の為に自分の手をライトの肩に置いた。

自分が何か言ってもライトは何処吹く風、と聞き流して絶対に降ろさないと分かっている。

だったら言っただけムダなだけだ。

…腹立ちまでは押さえられないけれど。

膨れっ面をしたリイナと、頓着せず彼女を見て機嫌良さげに笑うライトの様子に、フォルテは何時もの事だところちかも頓着せずに二人に歩みよった。

「それで？これからどうする？」

フォルテの無駄な言葉の無い、簡潔で建設的な質問に、ライトはそちらに顔を向け、お前らしいな、と呟いた。

口数少なく、表情も然程大きく変わらないフォルテは、周りから遠巻きに見られる事が多い。

リイナはフォルテと普通に会話するが、ライトが彼と仲が良かったから近くにいたリイナも慣れただけで、そうでなければ友人付き合い合いなどしていなかっただろう。

割合に整った容姿と、端的ながらも的確な言葉から伺える有能さ故に、女子の間で密かに人気が高い。
口数が少ないのと、気軽に声をかけられるような雰囲気では無い為、人気の高さを彼は知らないけれど。

対してライトは親しみやすい雰囲気を持ち、男女問わず顔が広い。リイナに対するスコンっぷりが若干マイナスポイントにはなるが、優しい顔立ちと態度に、こちらも中々の倍率の高さとなっている。

二人が傍に居ると視線が怖いんだよね」と暢気に思いながらリイナは口を開いた。

「とりあえず2・3日は様子を見るよ。できれば薬に頼らない方が良いし。頼るなら間隔開けないとだしね。身体が戻らなければ薬を調合するよ」

材料は有るし、調合する腕もある。

まだ身分は学生だったが、リイナの薬師としての知識と腕は折り紙付だ。

リイナ自身、薬師としての研鑽を怠らず、オリジナルの調合を良く実験しているし、知識の吸収にも貪欲だ。

だから調合実験中にイタズラされ、効果を予測出来ない事を素直に悔しいと思う。

ついでに今の縮んだ体型に、幼い頃の自分を思い出してにやつているライトにも腹が立つ。

リイナは自分を子供抱っこしたままのライトの頬を八つ当たりも込めてぎゅっとなつてやった。

イタズラの産物。 (後書き)

続きます。

のーさんきゅーだよ。
(前書き)

続きを書いてみました。

のーさんきゅーだよ。

何、この状況？

過保護にも程がない？

てかこれだけいるんなら誰か一人位助けなさいよ！？

比喻でもなんでもなく全方向から向けられる視線に、リイナは現実逃避した頭の中でツツコミを入れた。

薬の調合実験中に精霊^{シーリン}にイタズラされて縮んだ体型は、やっぱり一晩経つても戻らなかった。

それはまあ、仕方ない。

元々余り期待してなかったし。

でも。

とリイナは思う。

でも。

何でライトに子供抱っこされて学院の廊下を歩いているわけ！？

リイナは身体が戻るまで学院は休むつもりだった。

単位も出席も足りてるし、ノートなら後で借りれば良い。

別に数日休んでも何の問題も無いし、寧ろ休めば自宅^{むし}で色々実験出来る分有意義だとすら思っていたのに！

自分を抱っこしながらご満悦そうに歩くライトを睨み付けながらリイナは心の中で絶叫していた。

この（私限定）KYのバカ兄め！！

今朝も寝起きの悪いリイナはライトに起こされた。

それは別に普通で、何時もの日常の風景の筈だった。

問題は目を開けたら、満面の笑みを浮かべたライトのドアップがあった事だ。

思わず反射的に顔面に拳をお見舞いしても許されるだろう。

正当防衛だ。

悔しいのは幼児の力では殆ど痛みは無かったらしい事と、自分の拳の方が痛かった事だ。

全くもって理不尽だ。

更に理不尽なのがライトの態度だ。

ベッドから食堂に向かうのも、身支度に家の中をうろつくのも全てリイナは抱っこされて移動した。

自分で歩けると全身で暴れて主張したにも関わらず、だ。

「リイナはお転婆だなあ」

とか明後日の発言を笑顔で言っただけで、リイナの抵抗をものともせず封じ込めて己のしたいように振舞いやがった…いや、もとい。振る舞った。

年令や性別による体格差、力の差があるから勝ち目がないのを頭で解っていてもリイナは腹が立つのを抑える事が出来なかった。

「ちょっと！いい加減に降ろしてよ！私は赤ちゃんじゃないのよ！」

ライトの耳を引っ張って、その耳元で盛大に叫んでやった。
流石のライトも顔をしかめてリイナに不満な表情を向けた。

…それでもリイナを手放さないのは、天晴れと言おうかしつこいと
言おうか…。

「耳元で叫んだら耳が痛いよ？でも朝から元気なのは良い事だ。リ
イナは良い子だね」

ライトの的外れなのほん発言に、リイナは頭の何処かであちり、
と何かが切れた音を聞いた気がした。

「降ろせつつつてんでしょー！このバカ兄ー！！」

リイナは魂からの叫びを上げて全身全霊で力の限りライトの腕を退
けるべく抗った。

結局。

結局体力の無いリイナはものの5分もかからず力尽き、無駄に運動
神経有る上に鍛えてる人間の腕はミリ単位すら動くことは無かった。

そうして「一人にするわけにいかない」と良く分からない理屈を述
べられ、今に至る。

イタイ愛の域に達しつつある気がしてならないライトのシスコンっ
ぷりに、リイナは最早ため息をつく事しか出来なかった。

のーさんきゅーだよ。(後書き)

続きます。

アホか〜!! (前書き)

間が空いてすみませんm(| |)m
短いですが続きをUPしました!

アホかー！！

「可愛らしい光景の筈なのに…」

とある第三者がぼつりと呟いた言葉に、そこに居る当事者を除いた全員が胸の内で激しく同意した。

ちょこんと、という形容詞がまさにぴったりな姿で座っている幼児の頭はかるうじて机の上に出ており、足は床の遥か上にあった。

時折机の上に広げられた資料を、机の縁を小さな手で掴んで精一杯伸び上がって見ようとする仕草が見られ、小動物のような幼い姿は、大層愛らしい。

話しかけられると大きく丸い瞳でじいつと見上げ、相手の保護欲をこれでもかと掻き立てる。

事実、リイナに目を止めた教師が説明を求め、ライトが説明している間じつとリイナに見上げられた教師やそれを見ていた周囲が頬を赤らめて狼狽えた。

それに気付いたライトが教師とそして（器用にも）男子に向けて笑顔で威圧してからは、視線は向けられても決して彼等に近づく猛者はいなかった。

とにかく幼女の姿は愛らしかった。

…彼女と椅子の間に居るものを視界に納めなければ。

いや。何も知らない人間が見たらそれ込みでも可愛らしい光景と捉えられる、だろう。

造作は良い方なのだから。

見るだけ、なら文句なく鑑賞出来るレベルなのだ。
愛らしい幼女を自らの膝の上に抱き上げ優しい笑みを浮かべる有望
株な少年の姿は。

「リイナ抱っこしてるとちよつと暑いね」

「子供体温なんだから仕方ないでしょう！っていつか放せば良いで
しょ！？」

「丁度良いって言ってるんだよ。気温寒いし」

「人を暖房代わりにしないでよ！放せ！」

「昔は『ライト抱っこ』ってリイナがねだってきたのに」

「子供の頃の話でしょうが！」

嫌がる幼女と、目を細めて嬉しそうにリイナを見ながら決して離さ
ないライトのやり取りに、その場の全員が心の中で大きいため息を
ついた。

朝、ライトがリイナを子供抱っこして登場した時からずっと、二人
は注目の的だった。

リイナが幼女の姿、というのもあるが何より注目を浴び続けるのは
ライトの態度だ。

学年も違うのにライトはリイナを自分の教室まで連れてきて膝上に
座らせた。

以来片時も離さない。

そして件の会話。

注目するな、というのが無理な話だ。

「もお！いい加減離してよ！バカライト！」

癪癪^{かんしゃく}を起こしたリイナの叫びに、ライトはにっこり笑って飄々（ひょうぷ）と返した。

「駄目だよ。こんな可愛いリイナから目を離したら怖いヒトサライに拐われちゃうからね」

「が、学院にヒトサライが出るかー!!」

アホかー！と大激怒したリイナに大真面目な表情を向けてライトは言った。

「僕の可愛いリイナに触れようとする奴は全員ヒトサライだから付いていっちゃ駄目だよ？」

「誰がライトのよっ！そういう事は妹じゃなく彼女作って彼女にしてちょうだい！私を巻き込むなー!!」

「何言ってるんだい。彼女がいたとしてもリイナ構うのは変わらないよ？」

「変わってよ！」

リイナの渾身のツツコミにその場のライト以外の全員が同調した。本日何度目になるか考えるのも放棄した位繰り返し返された同調の瞬間だった。

類友でした…orz(前書き)

短いですが続きます(´・`・´)

類友でした…orz

「このバカ兄なんとかして」

「無駄だ」

フォルテの姿を見た瞬間、リイナは反射的に訴えたが、フォルテは無表情のままさっくりと切り捨てた。

「即答！？ちよつと位考えようよ！」

「無駄だ」

リイナのツツコミもこれまた即答で撃沈し、フォルテはライトに向かって口を開いた。

リイナが涙目で睨み上げているのにも頓着しない。

「セルゲイ師の呼び出し。今すぐ行け」

ええー、と嫌そうに声を上げたライトは、それでも呼び出しに応じる為に渋々立ち上がった。

「リイナは置いていけ」

当然のようにリイナを抱えたまま気乗りしない様子で歩き出そうとしたライトを、フォルテは言葉で止めた。

それに更に嫌そうに盛大に眉をしかめたが、ライトは自分の椅子にリイナをそつと座らせた。

そしてリイナの目線に合わせるように床に膝をついてリイナを見つめた。

「リイ？良い子で留守番出来るかな？」

「ッ！とつとと行け！」

リイナは思わず握り締めた右手をライトの顔面目掛けて繰り出した。

∞ ∞ ∞ ∞

あっさりと。

あっさりとリイナの拳をかわしたライトは、淋しがらなくてもすぐに帰って来るからね、と勘違いした寝言をぼざざいいやいや。言いながら名残惜しそうに何度も心配そうに振り返りながら教室から出ていった。

リイナは膨れっ面でそっぽを向いてライトを見ようとしなかった。

「誰かホントなんとかしてくれないなか、あのバカ兄」

呻くようにぼつりと漏らしたリイナの言葉に、フォルテは無言で視線を向けた。

目が無駄だと雄弁に語っていた。

そんなフォルテの様子にリイナは盛大に眉をしかめた。

その様子は先程のライトの様子と良く似ており、二人の血の繋がりを感ぜさせるものだった。

容姿も似通っている二人だからその点だけでも確かな繋がりは解るのだが。

「様子見なんて悠長な事してたら胃に穴が開くわ」

勢いをつけて椅子から飛び降りると、リイナは憤然とした様子で歩き出そうとした。

「実験室？」

「…私が分かりやすいのかフォルテの頭の回転が早いのか悩むところよね」

苦笑しながらフォルテを見上げて言うリィナに、僅かに面白そうな表情を浮かべてフォルテは言った。

「両方」

「悪かったわね、単純でっ」

可笑しそうに言うフォルテを睨みながらリィナがかみついた。
が、それに頓着せず面白そうな表情をしたままフォルテはマイペースに告げた。

「面白いから別に」

「…ライトの友達よね」

その言葉に心底ゲンナリした様子でリィナは呟いた。

急転直下過ぎだし

「っきゃあぁっ」

何時かの再現のようにその部屋から悲鳴が上がった。

∞ ∞ ∞ ∞

フォルテに抱え上げられたリイナは不機嫌そうな様子を隠すことなく周囲に撒き散らしていた。

「何でフォルテにまで子供抱っこ…ううう…」

「遅いから」

「歩幅が違うんだから仕方ないでしょ！」

「抱えた方が早い」

「実利一辺倒な発言すぎ」

「当然だ」

「……どこまでも本当にライトの友達よね」

何なのよその傍若無人なマイペースさ加減はさあ…

ぶちぶちと肩口で呟くリイナに無言で面白そうに視線を向けると、直ぐに無表情に戻り前を向いた。

目指す部屋に辿り着き、フォルテはリイナを抱えていない方の手でドアを開くとリイナを降ろした。

「ありがと、フォルテ」

その言葉にフォルテは片眉を器用に上げて答えた。
何だかんだ言いながらもリイナはこんな時素直にお礼を口にする。
たまに恥ずかしいのかそっぽを向きながら言い捨てるような態度の
時もあるが、基本は目を見て礼を言う。
それを見ると、フォルテは何時も複雑な気分になる。

リイナのそれは本人の気質にも依るのだろうが、ライトの影響が大
きい。

憤慨したり、邪険にしても結局リイナにとってライトが『特別』だ
という証のようで。

微笑ましいような、可愛らしいような……けれど微かに不快感も抱く。
人付き合いが苦手な自分と比べて羨ましいと言う感情もあるし、そ
うやって素直な感情を向けて来ることを嬉しいとも思うし。

複雑過ぎる上、全ての感情を自覚しきれていないフォルテは考える
事を放棄した。

何れ、解るときも来るだろうし、焦ってもいない。

ちょこまかと動くリイナを見ながら無表情の裏でフォルテはぼんや
りとそんな事を考えていた。

∞ ∞ ∞ ∞

リイナは器具や材料を手際良く使いやすいように並べていた。
実験は好きだ。

どんな実験をしようかあれこれ思索するのも好きだが、無心に作業
に没頭しているこの時間はリイナにとって大切な時間だ。

無心で向き合う事によって新たな視点が得られる事もある。
何時もより勘も鋭くなるようだ。

先ずは調合だ、と手間の薬草を手にとった瞬間、目の端を何かが過ったような気がした。

「……ッ！」

リイナが反応するより早く、後ろから力強い腕で引き寄せられ、気付くと離れた場所で腕に抱き抱えられながら座り込んでいた。

「フォ…テ？」

「怪我無いか？」

至極冷静なフォルテの言葉にリイナは混乱しながらも自分の身体を見下ろす。

見えるところに異変はない…と思う。

「…た、ぶん？」

半ば呆然としながら律儀に返答するリイナに視線を合わせて、安心させるように一つ頷くと、フォルテは腕の拘束を解いてリイナの前に回った。

眼前には散乱した器具や材料があった。

幸い壊れた器具は無いようだが、辺りは大風に吹き飛ばされたような惨状だった。

そうして、風が発生したと推測される場所に子供が一人、こちらを睨み据えて立っていた。

「シーリン…」

呆然としたままのリィナがぼつり、と呟くと、子供がリィナを見て叫んだ。

「ずるいぞ！お前！」

「…は？」

地団駄を踏みながら叫ぶと癇癪を起こしたように力を振るった。

「つきやあぁっ」

自分達に向かって来る突風に、リィナは驚いて悲鳴を上げた。

急転直下過ぎだし（後書き）

こんなところで区切ってすみませんm（
|（
m

終わった気がしません…（前書き）

お待たせ致しましたm（――）m
一応リィナおちびになる、の巻は終幕です。

終わった気がしません…

シーリン。

それは精霊の総称。

世界が夢見た時代に生まれ出でた原初のイノチ。

混沌の気が凝った末に顕れたモノ。

混沌が支配する空間より現れた彼らは混じり、離れ、溶け合い、消し合い、

さまざまな命を作り出した。

限界まで凝らせ、混じり合った末に血肉を纏ったモノ。

離れ、互いを消し合った末に純粋な気の固まりを纏ったモノ。

前者は血肉を糧とし、他者の血肉で己の血肉を補う。

後者は世界を糧とし、世界に満ちる気を貪る。

世界が固定され、存在が固定された時、それらは『ヒト』となった。
『ケモノ』となった。

そして、それらは『シーリン』となった。

火が『火』と呼ばれたように。

水が『水』と呼ばれたように。

対極のようできてその実、表裏の如く一身の存在として世界に放たれた、

混沌から生じたイノチ。

だからこそ。

世界は混じり合う。

何処かの世界の思想にあるように、火は究極の一つの元素ではない。
『火』の裡には、闇も光も風も…そして対極と言われる水さえも
内包しており、分かť事は、最早不可能。

なぜなら、ソレは『火』と名づけられてしまったから。
名づけられたモノを変える事は、無に歸す事以外不可能。

それがこの世界の理。
存在しているイノチが、理解している理。

ただ一つ。

世界だけが理解している理も存在する。

世界はイノチ全てを糧とし、死した魂は世界に喰らわれる。
記憶を、知識を絞り取られた残り滓が再び魂を構成してイノチ
を纏う。

そうして世界は成長していく。
いつか。目覚める為に。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞

思わずギュツと瞳を閉じて体を強張らせたリイナだったが、数秒経
つても
衝撃が無い事に恐る恐る瞳を開いた。

「……ライト？」

自分の目の前に庇う様に立っているいる筈の無い存在を見つけて呆

然と呼びかけた。

その呼びかけに振り返ったライトはにっこりと笑いながらリイナに手を差し伸べた。

「立てる？リイ」

「あ、…うん」

頭に疑問符を浮かべたままだったが素直にその手を取って立ち上がるリイナに、

ライトは更に笑顔を向けて口を開いた。

「お姫様のピンチに登場するのは騎士の役目だからね」

「…要するに探知結界と転移呪印仕込んでた訳ね」

「これが何の防御も無く人お前を一人にする訳がない」

リイナの疲れを滲ませた言葉をフォルテが若干同情を含んだような声音で、しかし

ばつさり切り捨てた。

これ、呼ばわりされたライトは「良く解ってるね」とにこにここと返した。

探知結界。

その名の通り、結界を張った人物の動向を術者が感知し危険を知らせるモノ。

そう言えば先週の結界の講義で張り方を習ったな、と現実逃避気味にリイナは思い出す。

フォルテとライトは2学年上だから応用編も叩き込まれている事だろう。

この世界では魔術も操気術も誰でも使える。

有るのは努力の有無と資質。

混沌から生じた世界故に、属性などは存在せず風も火も水も、世界に存在する現象全て

魔術で操る事は、出来る。

ただし、その魂に含まれる含有率によって多少使い易い、使い難いは存在する。

この学園で一通りの知識を学び、各々の好みも合わせて何を生業にして行くかを卒業する

までに決める。

リイナは在学半ばにして既に薬師としての地位も確立している。

ライトとフォルテは騎士を目指している…のかもしれないが、そういえば進路を聞いてい

ないとリイナはこっさり思う。

ただ、講義の取り方を見ていると剣術の実践訓練などに重きを置いているようなので、

そちら方面の生業に就くのだろう、と見当を付けている。

そこまで現実逃避した頭で考えて、はたと我に帰った。

そう言えば、さっきシーリンに攻撃された、なんだった。けど、何か静か？

現状を思い出して慌ててシーリンに目を向けると、シーリンは魔術で全身をぐるぐるに拘束

されて蓑虫状態で横倒しになっていた。

むーむーと涙目で唸りながらもぞもぞと動いている。

「うわぁー…」

哀れなその姿に思わず、声を漏らすと、フォルテと小声で何かを話していたライトがリイナに顔を向けた。

「リイ。こいつどうする？」

「え？」

「消しても良い？」

フォルは止めるって言うんだけどさ、と軽い口調で言ったライトにリイナは驚いて口を開いた。

「消す!？」

「うん。だってリイに危害を加えようとしたんだ。当然だろ？」

「いやいやいや、当然じゃないし、消すまで酷い事してないよね!？」

「リイは優しいね。リイに何かしようとした時点で存在すら消去するのは当たり前じゃないか」

「当たり前じゃないから!ちょっとそれ行き過ぎだから!！」

爽やかな笑顔できっぱりと言い切ったライトにリイナは思わず全力で反論した。

そしてその勢いでシーリンの方へ駆けだすと、彼の口の部分の拘束を緩めた。

魔術の締め付けが半端では無い事に気づいた為だ。

「ちょっと君、大丈夫？」

「だ、だいじょ…近寄るな!」

素直にお礼を言いかけた少年は、うつすら頬を赤くしてそっぽを向いた。

「ふうん？助けて貰ったリイにそんな態度取るんだ？」
「ちよっ…やめてライト！！」

につこりと瞳だけ冷たい笑顔を張り付けたライトが瞬間移動の如き素早さで移動してきたかと

思うと、笑顔のまま少年を踏み潰した。

ぐえ、と踏みつぶされた蛙のような呻き声を上げたシーリンの様子に驚いてリイナが抗議の声を上げると、渋々ライトは足をどけた。

「大丈夫？生きてる？」

「リイナに暴言を吐いたんだから死刑にしても足りない位だよー全
く」

後ろで物騒な事をばやくライトを無視して慌ててシーリンの上半身を抱えて踏まれた個所を手で確認する。

そうしながらちらり、とフォルテに視線を向けると、フォルテは一度微かに頭を頷かせた。

「だ、大丈夫だから放せ！！」

「んー大丈夫そうね。で、何で『ずるい』のか教えてくれる？」

「…放せ！！」

「教えてくれたら放すよ？」

「うう…ずるい」

「うん。何がずるいの？」

努めて優しく柔らかく諭すような声でそう問いかけると、真っ赤になったシーリンが床に視線

をやったままううと小さく唸る。

ゆっくりとあやす様に少年の背中を小さく叩いて待っていると、シーリンが思い余ったように口を開いた。

「ずるいんだ！」

「うん」

「ずるい！何時も結界がある」

「うん？」

「結界はあるし、こいつが居るし、ずるい！！」

「んんん？」

「ずるいぞ！お前！！そんなの有ったら近づけない！」

「は？」

けっかい？ちかづく？

言われた言葉の意味が理解できずに数秒呆然としていたら、自力で拘束を解いたらしい

シーリンはリイナの緩んだ腕を振りほども、「ずるいんだからな！」と叫んで姿を消した。

………はあ？

全くもってシーリンの行動の理由が分からないリイナは、そのままの姿勢で首を傾げた。

「…あの餓鬼。殺して良いよね？ていうか次見つけたら即座にコロス」

フォルテに後ろから羽交い絞めにされたままライトはぶつぶつと笑顔でそんな事を呟き。

フォルテはそんな彼らを見ながら胸中で盛大な溜息を一つついた。

リイナは直ぐに元の姿に戻るだろう…が。

平和で穏やかな日常は何所にあるのだろうか？

そう問わずにはいられない現状だった。

だって楽しいからね。
(前書き)

間が相手すみません…

だって楽しいからね。

「そうだ。薬草採りに行こう」

どこをどうしたらその結論に辿り着く？

不意に落とされた一人言に、ライトは内心でそう突っ込みを入れた。

「リイは本当に面白いね」

思考回路が。

内心でこっさりつけ加えて、人の良さそうな笑顔でライトは言った。

先程からリイナの言動を視界の隅に入れていたが、さっぱり理解出来ない。

リイナは先程己の爪を見詰めて、「伸びてるから切らなきゃ」と呟き、爪切りを探しだした。

そして棚を漁っていたかと思ったら、徐におもむろそう宣言したのだ。本当にどんな思考回路を辿ったのか気になる。

少女の言動といい、行動といい、端から見ていて予測がつかない事が良くある。

一応一般常識と呼ばれるものは持ち合わせているし、曲がりなりにも学園に所属しているのだから集団行動も対応出来る。

それ故、大抵は予測の範囲内の反応を返す。

それはそれで愉快な反応ではあり、見ていて飽きない。

けれどたまに予測の斜め上の言動をする少女はそれ以上に面白い。

それに少女は感情がストレートに外に出る。

喜怒哀樂のはつきりしたその表情を見るのも面白い。
だから、ライトはつついリイナにちよっかいをだしてしまう。

勿論、口にする言葉に嘘はない。方便は使うが。

リイナが可愛いと思うのも、本当だ。

自分以外でリイナにちよっかいだす存在は消えれば良いと、素で思う。

シスコン上等。とライトはそう思う。

だってその方がリイナを存分にからかえるのだから。

若干どころか大分黒い思考を展開しながら、けれど表面上はにっこりと裏など全くないような良い笑顔でライトはリイナを見つめた。
途端、リイナが不振そうに軽く眉をしかめた。

条件反射のその反応に、内心苦笑をもらしながらライトは表情はそのままに、口を開いた。

「リイってば、そんな顔しても可愛いね」

「…っ」

リイナはその言葉に心底嫌そうにげんなりとした表情を浮かべて、無言で居間を出ようとライトに背を向け扉に向かった。

反応を返すからいけないんだ、よしスルーだ。スルーしよう。

そんな少女の内心の眩きが聞こえてくるような分かりやすい反応に、ライトの笑みが深まる。

その瞬間、不穏な気配を感じたかのようにびくり、と動きを止めてリイナが振り返った。

その顔には警戒心が溢れ出るほど浮かんでいて、ライトは更になんとも笑った。

生来の感の良さが、それとも物心つく前から側に居るからか、他人なら分かる筈の無い己の笑顔の違いに敏感に気付くリイナに嬉しくなる。

「どうしたの、僕のリイ？」

普段なら、誰がライトのよ！？と鼻息も荒く噛み付くように反論されるのだが、今回のリイナは、ライトの様子に頬を引きつらせながら用心深く口を開いた。

「い、いいえ。な、んでもない、わ」

「何だか顔色が悪いよ、リイ？風邪でも引いたかい？ああ、大変だ！今すぐベッドで横にならなきゃ、安静にしてないと駄目だよリイ。僕がずっと付きつきりで看病してあげるからね、僕のリイ。大丈夫。寂しく何て無いからね」

不自然な区切り方でどこかなく喋るリイナを面白そうに見つめていたライトだったが、何とかリイナがしゃべり終わると、早口で畳み掛けるように一息にまくし立てながらリイナに歩みより、腕一本でリイナを子供だっこの要領で抱えあげた。

「何するのよ！」

ライトの素早い動きに対応しきれず、抵抗もせず抱えあげられたリイナは一拍遅れて非難の声をあげた。

「さあ、ベッドまで抱っこしてあげるからちゃんと大人しく寝てようね、僕のリイ？」

につこりと擬音が聞こえそうな程完璧な笑みを浮かべながらライトは優しく小さな子供を諭すような口調で返した。
リイナは怒気を堪え、普段より低い押さえた声音で感情を押さえ込むかのように殊更ゆっくりと喋りだした。

「ねえ、ライト？貴方の妹の頼み、聞いてくれる、かしら？」

「可愛い僕のリイの頼みを僕が聞かないことなんて無いだろう？」

「聞いてな……い、いえ、そうね。可愛い妹の頼みだもの。聞いてくれるわよね」

けろりと告げたライトの言葉について反応しかけたが、何とか堪えリイナは最後まで言い切った。

「ねえ、私元気なの。別に風邪もひいてないわ。健康だし今日は休日だし天気も良いし、在庫も補充したいから、薬草採りに行きたい

の

「うん。良いんじゃない？」

「だから寝てなく…っえ？そ、そうよね。良いわよね！じゃあ…」

行ってくるね。

そう続けようとしたリイナの言葉に被せるようにライトは素早く言った。

「僕も付いていくよ？1人じゃ危ないからね」

楽しそうに言うと、ライトはリイナを抱えたまま歩きだした。

その際、部屋のすみに常備している装備を手取るのも忘れない。

その装備はライトのものだったが、採取するために必要なものは揃っている。

「離してよ！私の荷物！」

「リイナの装備は、僕がいるから必要ないでしょ」

「必要よ！何勝手な事言ってるのよ！？降ろしてよ！」

「だーめ。危険だからこのまま行くの」

「高々その裏山に薬草採りに行くのに何処に危険が有るのよ！」

「足場良くないし、リイが転んだら危ないでしょ」

「何処のコドモ！？」

「リイは危なっかしくて僕は何時も心配なんだよ？」

「だから何処のコドモよ！私は幼児じゃないんだからね！一人で行くんだから離してよ！」

怒りで頬を染めたりイナの様子を内心面白く眺めながら、ライトは心底心配そうな表情で言い募った。

「昨日寝ぼけて階段踏み外しかけたでしょ？無理して抱えた荷物で前が見えなくてぶつかって荷物散らばった事もあったよね？ついでにこの間何もない廊下で転けてたでしょ？」

「……うう」

言い返せないイナはひくり、と頬をひきつらせ、悔しそうに唸りながらライトを睨み付けた。

羞恥で頬が染まったままライトを睨み付けるその様は、どこのお約束かと問わずにいられない位、可愛いとしか言い様の無い表情で、ライトは満足そうに笑った。

「さ、明るい内に帰ってきたいからさっさと出かけようね」

「……片腕で抱えあげて歩けるとか、おかしいわよ」

「ちっちゃくなったらイイ抱っこしたのが楽しかったからね。クセになっちゃったかな」

悔し紛れに毒づいた小さな言葉に、ライトはにつこりと爽やかな笑顔顔を浮かべて返答し、今度こそイナは言葉も出ず撃沈した。

もうやだこのシスコン…。

求む！条件（極狭）に叶うヒト！…真剣なんだけどなぁ（前書き）

長らく間が空いてしまいました…ナニモイエナイ

求む！条件（極狭）に叶うヒト！…真剣なんだけどなあゝ

自覚させてから折るべきか。先に摘んどくか。それが問題だ。

目の前の会話を静かに見つめながら、ライトはそんな事をぼんやりと考えていた。

彼の目の前では、今まで同じ講義を受けていた二人が、出された課題について激論を交わしていた。

「だから対比はリュウの種子とサツトヴァで11：26の割合を崩したらこの後の分離で上手くいかないわよ？」

「でもその対比じゃ錫も鉛も触媒に使えないぞ？」

「触媒はそれだけじゃないでしょう？何でそこでテインクトラ使っちゃダメなのよ！？」

「教材には錫か鉛の触媒の記載しかないだろう」

「教材の記載は必要最小限で応用出来なきゃ意味ないのよ？」

「教材にあるもののみで最高ランクを造る方が制約があって楽しいじゃないか」

「そんな拘り1人で作業する時だけにしてちょうだい！」

普通に作るのはつまらない、という何とも自信に満ちた返答にライトは内心で苦笑した。

まあ、確かに優秀なヤツだから出来るだろうが、変人ぶりが伺えるな、と思いつながら彼らの激論を見守った。

彼らの会話は専門用語が飛び交い、講義をとってない人間には付いていけない。

何となく分かる範囲で判断するにルベドというものを作るという課題が出たらしい。

その作業をマグヌス・オプス（大いなる作業）というらしいが…素人にはついていけない世界だ。

『鍊金』というのだから、最終目的は恐らく太陽の花を作る事だろうが、全くもって素人にはさっぱりだ。

激論を交わして入るが、彼らの雰囲気は楽しそうで、リイナは本当に調査という作業が好きなんだろうな、と思わせる雰囲気だ。

一人でやれ、と言いながらも彼の出すあれこれな拘りに簡単な実験を繰り返しながら合理的に判断して折り合いをつけようとしている。実験室で行っていた講義が終わった後、そのまま議論に流れ込んだから、機材は揃っている。

一方の彼は調査も確かに好きなんだろうからそれもあるが、楽しそうなの理由はそれだけではないことが見てとれる。殆どの人が気付かないだろうが、アレは半分はリイナをからかう為にしているのだらうと、次々と無理難題を口にする彼を見ながらライトは確信する。

まあ、あの反応は面白いからね、と身に覚えのたつぷりであるライトは思う。

そうして、本人も無自覚だろう、彼がリイナをからかう理由も正確に把握している彼は、さてどうしようか、と思考を巡らせた。

最終的にリイナにちよっかいをかける害虫を駆除するのは変わらない。

重要なのは自分がいかに楽しめるか、だとライトは内心で思う。

フォルテは自覚させてから折った方が楽しいから放置している。
あのシーリンは、あしらった時の反応が（リイナとは違う意味で）
楽しいので手加減して相手している。

それ以外の輩は楽しくも何ともないので即、駆除している。

さて。

この彼は自分を楽しませてくれるのだろうか。

ライトがそんな事を考えながら、表面上は爽やかな、微笑ましいものを見つめるような表情で密やかに彼女達を観察していると、突然リイナが焦った様子でライトを振り返った。
相変わらず良い感だ、と思いながら、ライトはにこやかにリイナに問いかけた。

「どうしたの、リイ？」

「…や、何か今背中ぞわつと…な、何でもないわ！うん。何でもない」

「変なやつだなー」

リイナはひきつった表情でごまかすように首を横に降りながら否定した。

そんなリイナを見て、からかうように変人（確定）がそう言ったが、リイナはそれに反応せず、疲れたようなため息を一つついた。

「このまま議論してもらちが明かないわ。まずは明日までにお互い構想の概略を考えましょう？というか、こだわりを全て挙げてきてくれるかしら、フロウ？」

あなたのこだわりを、一々聞く気力が無くなったわ。

とぼそりと口のなかで続けたリイナは、先に行くわ、と二人に背を向けながら言葉を放り投げると、そそくさと逃げるように歩き出した。

「え？ちよ、リイナ！？」

変人（確定）が、若干慌てて声を掛け、追いかけようと立ち上がりかけたが、ライトがその前に彼の額を押さえて止めた。
のんびりとした力ない動作に見えたが、彼が焦って立ち上がるうとしても全く動けなかった。

「これ、コツがあつてね。例えば非力なリイナがやったとしても立ち上がれないから」

にこやかに言うライトを、彼は不機嫌な感情を隠すことなく睨み付けた。

「離せ」

「うん。僕の言いたいことが終わったらね」

払いのければ良いのに気付かないのかな、案外抜けてるな、と辛辣な事を胸中で呟きながらライトはにこやかな表情のまま続けた。

「空気読もうね」

「……はあ？っつ！」

一言で言いたい事を要約して告げると、一瞬だけ力を込めて頭をわし掴むと、手を離して歩き出した。

振り返らずヒラヒラと手を降りながら、じゃあね〜と能天気な挨拶をするライトを数秒呆然と見送った変人（確定）だったが、はっと我に返り、なにするんだ！と声を荒げたが、その数秒で既にライトは視界から消えており、端から見ると間抜け以外の何者でもなかった。

斯くして、ライトの興味をそそらなかった彼は、即座に駆逐された。

後にフォルテに顛末を語り、皆骨なさすぎてつまらない、と締め括り、彼を盛大に呆れさせたのはまた、別の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236q/>

身辺雑記。

2011年9月19日07時24分発行